Projets de paysage
Revue scientifique sur la conception et l'aménagement de l'espace

23 | 2020
Paysage, autonomie habitante et action locale dans le Japon contemporain : regards croisés franco-nippons

「私的」な庭の地理学的意味と風景

-日本 の「私的」な庭の事例研究：言表行為としての庭の経験

The Geographical Meaning of the "Individual" Garden and its Relation to the Landscape – A Japanese Detour:The Garden Experience as an Act of Enunciation

Cyrille Marlin シリル・マルラン

Traducteur : Sakamoto-Marlin Maïko

Édition électronique
URL : http://journals.openedition.org/paysage/14022
DOI : 10.4000/paysage.14022
ISSN : 1969-6124

Éditeur :
École nationale supérieure du paysage de Versailles-Marseille, Institut national des sciences appliquées Centre Val de Loire - École de la nature et du paysage, École nationale supérieure d'architecture et de paysage de Bordeaux, École nationale supérieure d'architecture et de paysage de Lille, Agrocampus Angers

Référence électronique
Cyrille Marlin シリル・マルラン, « 「私的」な庭の地理学的意味と風景 », *Projets de paysage* [En ligne], 23 | 2020, mis en ligne le 30 décembre 2020, consulté le 10 février 2021. URL : http://journals.openedition.org/paysage/14022 ; DOI : https://doi.org/10.4000/paysage.14022

Ce document a été généré automatiquement le 10 février 2021.

Projets de paysage

View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by OpenEdition

「私的」な庭の地理学的意味と風景

-日本 の「私的」な庭の事例研究：言表行為としての庭の経験

The Geographical Meaning of the "Individual" Garden and its Relation to the Landscape – A Japanese Detour:The Garden Experience as an Act of Enunciation

Cyrille Marlin シリル・マルラン

Traduction : Sakamoto-Marlin Maïko

1 「私的」とされる庭が、地理的空間として理解されることが少ないのは大変意外だ。「家庭空間」について研究する地理学者たち (Staszak, 2001;Lazzaroti 2006 ; Pezeu-Massabuau, 1966)の関心を集める住居とは反対に、私的な庭を特定の社会的現実の理解を深めるために有用であり得る空間の一区分として地理学的対象にしようと試みた考察は今までなかったように思われる。フランスの文化地理学と、いわゆる「社会」地理学は、この主題をいまだに真剣に捉えていない。庭が提起する問題と風景のそれの歴史的・系譜的ないきさつが、地理学のツールボックスの中での私的な庭の特殊な立場を生み出したと考えても良いだろうが、それはむしろ私的な庭に不利に働いたようだ。地理学者の関心を引くのは、より集合的なヴァリアントであることが明白な庭(公園、庭園、小公園、共同庭園、労働者の庭など)か、または食の供給機能が庭の領域を超えて経済的な問題に関与している庭(菜園)に限定されるように思われる。要するに「私的な」の庭という概念が、我々の地理学的関心に値するほどに社会性がないという強力な「アプリオリ」に捉われてしまっているのが現状である。。つまり「私的な」庭は「大地のエクリチュール」のプログラムには無用であり、人間環境（風土）の理解に寄与する補足的なツールにもなり得ないという訳だ。30年前、地理学者のポール・クラヴァルは、地理学における「公園と庭の研究」の一定の基軸を確立することを目指しながらも、地理学の研究対象として庭の私的な性質を暗黙のうちに避けてしまった。

2 したがってルロワ＝グーランが、かつて『身ぶりと言語』の中で言明したように、人間行動の調和のとれた科学的アプローチに立ち戻る必要がある。「私的」な庭が地理学的アプローチの対象にならないとすれば、それは「私的」な庭が抽

象的または非物質的な偏った考察によって損なわれ、暗黙のうちに、「物質的なものだというよりも、むしろ社会的なものが物質的なもののなかへ流れこんだ」ものとして取り扱われてきたからだろう(Leroi-Gourhan,1965, p.249)。多くの場合、庭の非物質的な側面が物質的な側面より優先される。さらに、庭の物質的な部分が取り上げられる場合には、その空間構成と技術の部分が優先される。庭の「有機的」特性が取り上げられることは稀だ。結局、庭とは何よりもまず個人とその環境、人間集団とその環境の関係の一形態であり、人間身体と社会的身体と環境との相互作用が原初的な形式で行われる空間である。よって、庭に関する最もありふれたこの言説が行きつまるなら、それを修正し、地理学的課題により合致した別の庭の概念を浮き上がらせる言語プランを、庭園史や人類学などの領域ですでに展開されている諸概念に関連付けながら練り上げていかなければならない。本稿で目的とするのはまさにこのことである。

3 日本研究者であるオギュスタン・ベルクは、庭を、風景を考察する際の重要な鍵として位置付けた数少ないフランスの地理学者の一人である。この庭の位置付けは、和辻哲郎の思想と、ベルクが「ミリュー・ユマン *milieu humain*」と訳した「風土」の概念を拠り所とする彼の地理学的思想基盤を構成する本質的な諸概念と複雑な仕方で接点を持つ(Watsuji, 2011/1935)。ベルクが注目したこの風土の概念は、フランス語 のペイザージュ *paysage* の和訳の一つである風景の概念と同様、社会的身体と個人の身体の入れ子構造についての新たな視点をもたらした。この特殊な入れ子構造によって、地理学的対象としての「私的」な庭の問題と風景の問題を結び付けることができるように思われる。

4 本稿では、この結び付きにより「私的」な庭と風景の語の一般的な意味をずらすことが可能になるという仮説を採用する。それは今日我々が環境に違うやり方でかかわっていく方法を考えるために必要な下準備でもある。このように方向を定めれば、庭と風景の概念を経由した様々な行動形態を実際に探究していくことができるだろう。

5 このためには、まず一般的な庭の概念を特徴づけるアプリオリを、以下の2通りのやり方で明確にしたい。1. 現行のフランスの地理学事典における庭の語の位置付けとその意味を総括する。 2. それらと日本の一定の庭の概念との本質的差異のいくつかを、日本の歴史の中で庭の語に付与されてきた意味を介して対照する。次いで、著者が日本で観察した「私的」な庭の2つの事例が、庭の概念を地理学的次元まで拡げるための考察の基盤として使用される。

今日の地理学における庭の概念

6 ポール・クラヴァルが、フランス地理学者協会会報の中で、「公園と庭の研究」は「地理学者によってあまりにも疎かにされてきた」 (Claval, 1989)と認め、一定の研究基軸を確立する必要を説いてからかなりの時間が経った。地理学の領域は以後大きく進化し、庭についての研究も発展した。しかし、自らの論文の中では多様な文化的形態という形でしか庭を取り上げなかったクラヴァルのように、「私的」とされる庭はいまだ非常に相対的な存在にすぎない。「私的」な庭が、庭園理論および庭園史、社会学、人類学、民俗学、哲学、美学、医学、精神医学、生態学、都市工学、ランドスケープ・アーキテクチャーなどの様々な領域で研究対象として広く認められているとしても、地理学において実際に研究対象になっているとは言い難い。僅かな研究成果はあるものの、地理学における庭の概念的空隙をそれらで埋めることは難しい。

7 フランスでは、1970年代以降、地理学の基本的語彙、研究対象、研究ツールを総括し、正確に更新していこうとする様々な試みの現れとして、地理学の事典が相次いで刊行されてきた(Georges et Verger, 2013; Brunet *et al.,* 2005 ; Lacoste, 2009 ; Baud *et al.,* 2013 ; Lévy & Lussault, 2019)。このリストにさらに2冊の都市計画と領土開発の事典を加えれば(Merlin & Choay, 2015 ; Pumain *et al.,* 2006)、地理学における庭の立場と意味について一種の総括をすることは可能である。

8 『地理学および社会空間の事典』 (Lévy & Lussault 2019)の「庭」の項目を見ると、「地理学者たちが庭にほとんど関心を示さないことは大変奇異に思えるが、最近では豊かで複雑な空間として少しずつ関心を集め始めている」といったように、最初の数行から30年前のクラヴァルの総括が透写されている。

9 これらすべての事典には「庭」の項目が立てられているが、そこで付与された意味は明らかに同様の捨象的な還元に基づいている。庭の語といえば、一見、より社会的な観念が優先され、庭づくりの個人的行為は必然的に遠ざけられる。すべての事典が、「たいていの場合は囲われた空間」という庭の特性と、庭と住居の関係に関する短い前置き(「庭とは、通常家屋に隣接した土地の一画を指す」(Brunet *et al.,* 2005)、「たいていの場合、家屋のそばの土地を指す」(Lacoste, 2009)、「家屋の近くに位置する田園的空間の部分(...)。広義には、都市空間における家屋を取り囲む緑地空間」)(Georges et Verger, 2013) に続いて、庭の語に集合的および/または文化的意味・形態を結び付けている。明らかに、地理学はこのようなやり方で庭という家庭空間を、空間の社会的解釈の一要素にしようとしてきた。よってすべての事典が、労働者の庭、家庭庭園、公共庭園、植物園、順化植物園、動植物園、湿地植物園、緑化都市、そして最近では共同庭園などの、庭の概念とその社会的側面の結び付きを優先的に証明するような庭の「類型」に言及している。端的に言えば、これらの事典において庭の社会的次元は以下の言語的位相において表される。・庭は、集団的自給自足経済に参与する食糧生産の空間である。・庭は、社会的交流と交換の空間である。・庭はシンボリックな空間である。・庭は、社会的表象の空間である。・庭は、社会的実践の触媒である。・庭は、生物多様性の状態または貯水量の減少などを介して社会環境現象に関与する。・庭は、社会的進歩のツールである。・多種多様な区画の庭の集合体(労働者の庭、家庭の庭、共同庭園)は、一つの都市形態を成している。

10 このように、地理学者が「私的」な庭に興味を示すのはその空間が一種の社会的なものの指標となる場合だけである。まるで地理学者にとっては庭が自らの境界を超えて特定の社会現象に参与するか、またはそれを表象する場合にのみ地理学的な存在および根拠を持つことができるかのようである。このように庭は、常に庭を何かの表象空間にすることを目指す一義的な解釈システムにおいて翻訳されることでしか地理学的対象になれない。庭の社会的解釈は、常に庭であるところのものを超えていってしまう傾向にある。庭が社会的な指標であり社会的実践の触媒であることに議論の余地はない。しかし、この解釈は庭のもう一つの現実の記録を隠蔽してしまうがゆえに、これらの庭の定義は捨象的な還元の産物と言わざるを得ない。庭が、個人の環境を「変容」させる個人的行為の空間としてまず見なされたことは今までなかった。庭をつくる者とのかかわりにおいて観察されることはなおさらなく、庭は自らが持つ社会的意味との関連において常に観察されてきた。「私的」な庭の読解に傾注することなく、社会的なものを一挙に流し込めば、庭づくりの行為の類型的アプローチと、その行為が個人にとって意味するものが消えてしまう。

個人 - 社会のカップリングのアプリオリを打ち破る

11 この地理学の「私的」な庭へのアプローチの背後には、個人に属するものに対するアプリオリがないだろうか？個人と社会と結び付ける特定のやり方が隠れた前提としてありはしないか？つまりゴフマンが個人と社会の「カップリング」と呼ぶものの形態(Goffman, 1983)に関する前提である。この前提は、社会的なものの視野を優先させ、庭をつくる者を消し去ってしまう。

12 この問いに関して、ランドスケープ・デザイナー・研究者であるベルナール・ラシュスによるフランス北部の炭鉱労働者の庭に関する研究によって一つの手掛かりがすでに示されていた(Lassus, 1977)。ほぼ人類学的な研究方法に基づくこの研究は、個人の「オートポイエーシス[1]」、つまり庭の日常空間を介して開花する個人の創造的能力の諸形態を明らかにするという特殊な目的が隠されていた。ラシュスの研究は、1950年代以降に歴史学者、社会学者、哲学者によって行われた、普通の人々が彼らの庭を通して見せた独創性に光を当てた一連の研究に寄与した。郵便配達員シュヴァル、ピカシェットの象徴的な庭や道路沿いの名もない庭などの庭は、「アール・ブリュット(art brut, 生の芸術)」と共通点を持っていた。

13 これらの研究は、「私的」な庭についてのまったく別の視点を提示した。これらの研究における庭は真に「私的」だった。すなわち、それらの庭はある個人(それは常に名前を持った私人である)が自分の持ち得る手段を使ってその固有の状況において想像し作り上げた結果であった。庭はここでも庶民文化のある種代表的な空間とされてはいたのは確かだが、それは表象的または触媒的な空間としてよりも、何よりもまず「固有の環境」を整えることを目的とした個別的な空間の生成行動の想像/創造プロセスが実行される場所として見なされた。最初から庭をじかに密接に集団に結び付けたり一般化された代表的な社会規範の産物にしようとせず、反対に、庭の固有性に立ち戻って住民の庭での行為をできる限り孤立させ、自立させようとした。個人は社会規範の「代表者」としてというより「探究者」として提示されていた。つまり、マイナーな空間の生成行動規範を探し求める探究者として。探究者には、自らの家庭空間をつくるためのある種の行動の自律性が認められていた。

14 これらの研究で用いられた庭へのアプローチは、当時の哲学的および社会科学的なアプローチと類似するものである。このアプローチにアングロサクソン系の社会科学において当時盛んに議論されていたパラダイム論の単純な影響 (この時期は方法論的個人主義理論の隆盛期であった)を見る代わりに、1950〜60年代のフランスの現象学、心理学、社会学、人類学などの領域間の学際的な知の交差と関連付ける必要があるだろう。このアプローチの背後には、人間と人間の環境との関係を理解するために適用されるモーリス・メルロ＝ポンティ(1972)の行動の哲学的試論、アブラハム・モルス(1972)の空間心理学の研究、ドゥ＝セルトー(1980)の方法論的そして社会学的「分岐」思考、ドゥ—ルーズとガタリ(1972)の主観性の批判的アプローチ、ルロア＝グーラン(1945)の具体的方法などが複雑に絡んでいる。つまり、「住民/造園家 *habitant-paysagistes*」が環境に働きかける能力を識別するため、必要なら規範的な空間の整備(デザイン)概念を退けつつ、庭で何が起こっているかを観察することが重要であった。庭は、個人にとって自らと世界とのかかわりを具現するのに適した行為空間として見なされていた。庭をつくる者を、メジャーな行動の結晶化の作用因というよりむしろ周縁的な整備行動の「マイナーなもの」とするこのアプローチは、当時のアングロサクソン系地理学者達のマイナー集団を扱った様々な研究のそれと共通点を持つ。

15 これらの研究が開いた道にしたがうとすれば、地理学事典における庭の用語を暗に方向付ける個人/社会のカップリングとは異なる個人/社会のカップリングを受け入れなければならない。そのためには、「私的」と言われる庭を、風土のアプローチにおいては多かれ少なかれ疎かにされてきた社会的なものの次元、つまり空間の整備(デザイン）行動の規範を変えていく試みの様々なプロセスに近づくために最適な対象として見なす必要がある。それは自らの固有の環境に働きかける個人の行為を通して、主観性を再生させる個人的な試みのプロセスとも言える。要するに、「私的」な庭は社会規範の触媒である前に欲望と適応の空間であるという考えから再出発しなければならない。すなわちガタリが述べたように、庭をつくる行為を「特異化の過程」と見なす必要がある。それは、「すでに出来上がっているシステムの中で創造と増殖が可能な地点(中略)」であり、「特異性の核を探り出しながら周辺性に滞留して、マイナーへの生成(devenirs mineurs)」に向かう」(Guattari 2013, p.215)。したがって、庭を「広く認められた意味の世界から新たな実在的領土を構成する非シニフィアン的リトルネロの世界(非シニフィアン的な回帰)への移行を可能にする」個人的行為の空間と見なす必要がある。すなわち庭とは、人間の生の本質的な隠喩であり、あるいはまた、私たちの実在的領土の再生が、空間を生成する行動を通して潜かに実現される空間の一つに他ならないことを認めねばならない。

庭をつくる者はいったいどこに？

16 庭の「社会的」または「文化的」と言われるアプローチのベールの下に常に覆い隠されてしまうものは、したがって庭をつくる者への言及である。それとは反対に、庭をつくる者に言及するアプローチにおいては、規範化の運動ではなくマイナーな主観性の系譜の想像力を前提とする社会的なプロセスを説明する庭の能力が発揮できる。これら2つのアプローチの違いは、本稿の基盤にある問題に直接通じる。それは、庭の地理学的問題と風景の地理学的問題は実は同じものだということだ。このような視座から問題を提起することは、別な仕方で庭と風景の関係を復元できる方法でもある。と言うのも、庭をつくる者の失踪は、風景を考える際に重要だと著者が考える「住民 *habitant*」の概念が驚くほど似通ったやり方で地理学の事典の中で概念的、実際的にほぼ不在であるという事実をともなうからである。

17 「住居 *habitat*」が地理学の伝統的な対象であり、「地球空間に住まう」ことが地理学を基礎付ける重要なパラダイムだとしても、地理学の「住民」はいまだ非常に一般的な考察に捉われたままである。ちなみに、事典からの住民の失踪(最も古い事典には純粋に人口の統計データとして存在する)がフランス社会地理学の背景において「住民」の概念がいくつかの概念化の試みによって再び登場してきた時期とほぼ重なるという事実は興味深い (Hoyaux 2015, Lazzaroti 2006)。ともかく、地理学における「住民」の語の未来は絶たれた訳ではない。エリゼ・ルクリュは、著書の『世界地理』事典において、人間一般ではなく「多様な人間」、とりわけ局地化した人間を扱っている。地球上の人類(人口)の統計ツールとルクリュが観察した多様な人間との間に、「住民」という用語の資格について策を講じる大きな余地がある。地理学者フレデリック・オイヨーは、例えば、レヴィとリュソーの『地理学と社会空間事典』に準拠しながら「住民に対応するもの」の範囲を定めようと試みている。住民とは、「主観的な内面性、志向性、自律的な戦略能力、言表能力を備えた」人間存在であると理解される。「したがって、住民は、規範的および概観的な分析によって、拘束を受けることなく規定を超えていくことが

でき、自らの利益のために、または時には知らず知らずのうちに、物質的、歴史的、政治的、経済的、社会学的な可能性を、とりわけ自らの行為と彼を取り囲む人々の行為が示す意味によって、自らの固有の地理的現実を構築するために開拓することができる」 (Hoyaux 2015)。

18 しかし、この住民の概念は他の類似する諸概念と混ざってぼやけてしまいがちだ。実際は、住民は地理学の辞書から本当に消えたのではなく、多くの場合、他の何かになっている。個人は、地球上の住民の立場に決してアクセスできず常に他の名に置き換えられてしまう。個人は、アクター、観客、見学者、行為者、行為主、使用者、消費者、そして時には不法占拠者になる。個人は、「参加」または「共有」し、所属するグループや社会のほかのメンバーとの「共通」点によって定義される。個人は、概略的に定義できる役割に落とし込まれるか、現象学的というよりむしろ機能的な社会要素に還元されてしまう。個人の行為は、直ちに行動の一般化と規範化の渦に巻き込まれてしまうのだ。自らの環境に日常的に働きかける者は、実際にそれであるところのものと違う「装い*habit* 」を常に纏わなければならない。つまり、人間として地球に住まう方法を日々改良しようとしている者が、だからといって地理学的存在になれるという訳ではないと言うことだ。彼は、社会的存在としてのその複雑さにおいて決して完全に彼自身になれない。彼に孤独を認めることは不可能である。

19 住まう方法を具体的に創造し実践している者が地理学的言語から追放されている事実は、庭と風景の概念がある特定の意味において絡み合っている言語の地図がそこから浮かび上がる地理学的思考の癖を示している。個人の空間生成行動の理解に社会的なものを流し込むことを優先させることは、庭を複合的な地理学的対象として考えることを妨げる落とし穴となり得る。

現実を庭として指標化する。現実を庭「として」みなす。「庭的行動 comportement-jardin」 の概念

20 オギュスタン・ベルクは、庭とランガージュが特別な地位を占める思想を展開した数少ない地理学者の一人である。それが日本研究の文脈において行われたという事実は取るに足らないことではない。ベルクはまた、自らの研究に、彼ら自身庭に関する理論的、実践的な思考を追求したアカデミックなランドスケープ・デザイナーとして著名なベルナール・ラシュスと中村良夫の研究を結び付けた数少ない人物でもある。ベルクは、中村良夫の風景についての理論的試論の一つ、『風景学入門』 (Nakamura, 1982)が刊行された直後、非常に大きな影響を受けたという。ベルクは以下のように述べている。

> 「この薄い書物が、私に「見立て (voir-comme)」の道筋を示してくれ、今日私が現実の本質的な存在論的、論理的メカニズムと考えるものを着想することができた。私にとってはそれほど重要な書物である」 (Berque, 2021 年刊行予定)。

21 ベルクは「見立て」のプロセスを説明するために2つの重要な庭の例を挙げている。源融(みなもとのとおる)(822-895)は、河原院を建造する際に、現在の宮城県にある陸奥国塩竈(むつくにしおがま)の海辺の風景を模して池とその周辺をつくらせた。源は、池の見立てを完成させるために海水をその池に引かせた。[2]

> 「中村は、これらの風景の表象が実風景を様式化したものだとすれば、今度はこれら様式化された表象が風景の知覚を条件づけ、「自然の風景を逆に庭園の景色のように見る」に至ったと指摘している」 (Berque, 2021 年刊行予定)。

22 「逆に見る」ことの最も有名な例の一つは、広島県の厳島神社の整備である。厳島神社は、海岸の広がりがまるで河原院の泉水のように見えるように設計されている(Nakamura, 1982)。

23 見立ての概念は、庭づくりの行為のアプローチに、ルロア＝グーランが『身ぶりと言葉』 (1965)の中で展開させたテーゼを想起させるランガージュと(整備)技術の間の密接な認識論的関係を再び取り入れ、さらに人間存在が行動することを決心し自らが組み入れられている状況を庭として変容させていく時間という人間経験の基本原理を取り戻すことを可能にする。それは言い換えれば環境に対して別なやり方で行動する時間である。この時間はどのような性質を帯びるのか？ベルクは、「見立ての象徴体系は、現実の表象というだけではなく、現実そのものを再創造することを含意する領土の占有のメカニズムと結び付く」 (Berque, 2020)と正当に述べたが、このメカニズムは身体活動、手と目の動作、現実の人間的現実への指標化の行為から始まる。「領土の占有」行為というより、主観化のプロセスをともなう領土の原初的な「捕捉」、すなわち環境との接触による状況に応じた主観性の変容がここではむしろ問題ではないだろうか。この現実を庭へと指標化する時間、庭づくりの行為を導く状況における行動の変化を「庭的行動 *comportement-jardin*」と名付けることができる。

24 庭の社会的次元、言い換えれば私的な庭の個人/社会のカップリングの形態は「庭の形態」のうちにではなくむしろこの「庭的行動」の性質そのもののうちに探す必要がある。つまり、現実の一部を庭として「見ることを行う *faire voir* 」行為のうちに。ここでは、フランス語の「*faire voir* 」という表現は本来の「見させる」という意味ではなく、「見るという経験をする」という意味で使われる。フランスの現代詩人・文法家のエマニュエル・オカールは、ウィトゲンシュタインの有名なトートロジー「すべての経験は世界である。」(したがって主体を必要としない。)を踏まえて「視線と庭が一つになる」と述べた。この「視線と庭が一つになる」時間がここでは重要なのだ。「すべての経験は世界である」とは、オカールにとって以下のことを明確に意味していた。1. 私が世界の中で経験をしているのではなく、経験が世界である。2.世界はすべての経験の総体ではなく、どの経験も世界である」(Hocquard 2001)。現実を庭として見る行為、現実の庭への指標化を通して、庭の概念はたいていの場合単なる空間の一形式に還元されてしまう地位からオカールの言う経験と世界の地位に移行できるのである。

言表行為としての庭- 庭の古代の意味から何が学べるか？

25 指標化の概念は、じつは「庭」という私的な庭を指す日本語の古い用法の一つに含まれている。確かに現在最も広く了解されている「庭」の意味は「住居の多少なりとも植物が植えられている空間」であり、その機能が「住居の延長部分に位置するたいていの場合屋外にある空間装置」だとしても、『日本の生活空間』事典の庭の項目を作成したニコラ・フィエヴェは、その古い語意は必ずしも家屋に隣接する囲われた空間を表す訳ではないと強調する(Fiévé, 2014)。

26 古代日本語は「庭(にわ)」と「園(その)」の2つの語を区別していた。「園」は、古代日本では食用作物などが栽培された囲まれた庭を指すために使用されていた。「果樹園、野菜畑、天皇の庭園(禁苑)」がそれに当たる。この意味では、「園」はフランスの地理学事典で共通に見られる公園の語の意味と暗に対になっている「庭」の語の意味と似ている。多くの場合、そこでは庭は「囲われた場所」また

は予め境界が定められた形態に還元されている[3]。一方で、「庭」の語は、過去にはその一般的な意味からも家屋に近接した作物が栽培されるか植物が植えられた空間という参照からも離れたとりわけ2つの意味を持っていた。ニコラ・フィエヴェは、古代詩を引用しこれらを説明している。1. 「庭は、静かな海面を意味する。海を荒れさせていた神が静まったからだ」2. 「庭はまた儀礼が行われる屋外の空間を指し、さらに古い時代には「神を崇敬する神聖な場所」を指していた」(Fiévé, 2014)。

27 日本の歴史の流れにおいて創作された庭の諸形態にこれらの意味の波及を数多く見出すことができるとしても、これらの意味が、庭づくりの行為の本質的な性質をより明確に私たちに示してくれているという事実の方が本稿の考察にとってはより重要となる。第二の意味は特に啓発的で、神籬(ひもろぎ、周りを囲った神聖な空間)、「何本かのしめ縄によって周りから隔離された小さな空間」、 依代(よりしろ) 、榊の枝を使って簡単に作られた「神霊を呼び寄せるための憑依点またはアンテナ」、注連縄(しめなわ)、「神聖な場所またはモノの境界を示す」木の周りや2つの岩・小島に間に張られた神聖な縄といった、神道の聖なる空間の原型である可動性の暫定的装置の設置を介した「日本文化に固有の空間の考え方と作り方、場の作り方」とユルシュラ・ヴィゼ=ベネデッティが定義した神道の空間整備の文化に根差した特殊な文化特性と関連付けられる。 (Wieser Benedetti, 2014)。

28 ここでの整備または空間への介入行為とは、その場のすべての人間に差し向けられた表徴、他の存在あるいは環境の断片(木、石、小島など)に向けられる人間の視線の表徴を配置する行為であり、主観化のプロセスが実行されたこと、つまり現実の一部が聖なるものとして指標化されたことを示す。このような現実の一部の聖なるものへの指標化は先史学者や宗教史の研究者によって紹介された多くの文化に共通する共通点である。それはこの行為の受け手がこの世界の一部を知覚し占有するやり方を儀礼を通して変更(変形)させる焦点を生じさせることを目指す。この整備行為はいわば、現実の指標化の受け手全体という暫定的な共同主観の確立を通して世界を「構成*configurer*」していく「言表行為*acte d'énonciation*」によって成り立っている。

29 このような空間への介入プロセスによって、庭づくりの行為の基盤にあるものを別なやり方で言い表すことが可能になる。このプロセスはよって、囲い込みの創建者的な行為やより広義には空間の境界画定行為ではなく、むしろ原初的な言表行為から始まる。つまり、環境の断片を庭として言表する行為である。それはつまり誰かが他の誰かに「これは庭です」と言うことである。境界が定められているという庭の性質は、よって社会的に予め方向付けされたいわば制度化された形態的結果にすぎない。何よりも、それは環境を庭として言表する行為という原初的な行動形態の一つの可能性にすぎない。

日本における現実の庭への指標化のプロセス

30 現在の日本では、囲われた場所の境界画定の産物である庭よりも指標化の産物である庭の様々な例を見ることができる。それらの庭では、予めフィルターがかかった庭の言表に先を越されることなく言表行為の性質が重要な役割を果たす。これらの庭を観察することは、庭の概念を様々な社会の地理学的理解を促進させるツールに進化させるために役立つだろう。観察されたすべての庭に共通するのは、住民が常に状況に応じた個別的なプロセスを通して公共空間の使用様式を自ら決定していくという事実である。結果として、これらの庭はすべて東京の小さな路地や空き地、高速道路の歩道橋など、規範化された居住様式から解放された

空間として見なすことができるほど日常空間の中では特殊な場所にある。「自律性」の概念を「自分自身で規範を決定する」という本来の意味において捉えるとすれば、そして規範の探究において「集団」の規模を予め決めないとすれば、これらの庭はある種の行動の自律性を目指している。

31 囲われた庭のアプリオリとの性急な方法論的関連付けを暗に助長する「空間の占有」の分析グリッドをこの種類の庭的行動に直ちに適用するのを避けるため、そしてこれらの現実の一部を庭と宣言することを目指す言表行為の理解の腑を通り過ぎてしまわないように、著者はこれらの庭を長期にわたって一定の方法にしたがって観察することにした。そのために著者自身が住民となり、自ら庭をつくるというフィールドワークの方法を採用した。

東京、池袋の庭

32 1998年10月から1999年4月までの6か月間、著者は東京・池袋北部地区の庶民的なアパートに滞在し、地区の路地を昼夜巡回してどれ一つとして囲いによる空間の境界画定を前提としない特異な「庭的行動」の30ほどの例を幸運にも観察することができた。

図1．東京、池袋で観察された庭の例

東京都豊島区池袋本町1-5
(1998年10月17日午後11時)
毎晩、若い男性が2本の高速道路に挟まれた歩道橋の上でサクソフォンを演奏している。そこではコンクリートの巨大な柱がちょうど共鳴板の役割を果たす。彼は楽譜を歩道橋の手摺りに置き、街灯の灯りの下に立って演奏する。毎晩、歩道橋は稽古場になる。住宅地から離れているので誰にも迷惑を掛けることはない。

東京都豊島区西池袋1-29
(1998年10月13日午後2時)
年老いた婦人が、ゼラニウムの鉢を2本の道路に沿って点々と並べ定期的に手入れしている。ゼラニウムの鉢の存在はこの老婦人が午後の大半を過ごす空間の境界を示している。彼女はたいてい家の前に置かれた木製ケースの上に座って煙草をくゆらせている。
東京都豊島区池袋1-7
(1998年11月17日午前11時)
毎日午後になると、老夫婦が空き地をまるで自分たちの庭のように手入れをしている。空き地のいくつかの植物に水をやり、その周りの草取りなどをして世話をしている。
東京都豊島区西池袋1-24
(1998年10月13日午後9時)
ある花屋は、外に出した花の鉢植えの値札を夜になると裏返す。毎晩、商品の陳列台は路地の小さな庭になる。

東京都豊島区池袋1-17

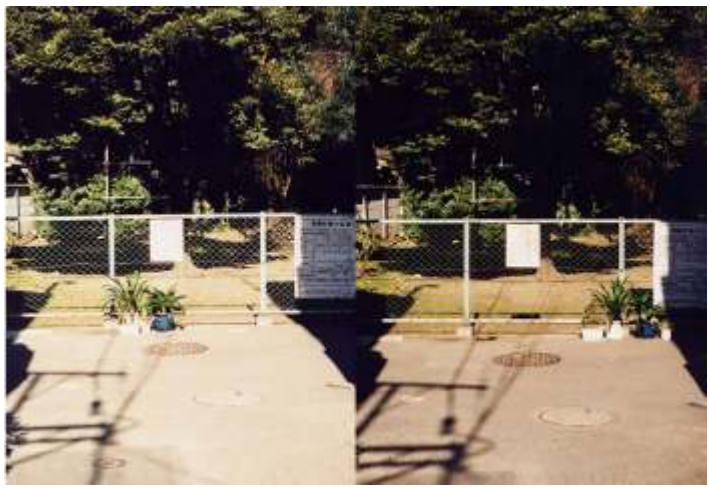
(1999年3月8日午前10時)

毎朝、サラリーマンが自転車で通勤している。彼は、路地の中央近く(車はほとんど通らない)を完全に直線でなく心持ち弧を描くように自転車で走っていく。しかし彼がこのような走り方をするのは天気の良い日だけである。天気の良い日には路地のアスファルトの上に電線が影を落とす。その影を正確になぞりながら走っているのだ。

東京都豊島西池袋1-14

(1999年3月5日午前9時)

ある老婦人は、毎朝自宅前に並べた花の鉢植えを日光が当たる路地の一画に移動させている。老婦人は、鉢植えを日なたと日陰の場所に応じて午前中何度か移動させる。近所の猫たちが喉をごろごろ鳴らしながら老婦人の作業を見守っている。



東京都豊島区池袋1-8

(1998年12月21日午後3時)

ある高齢の男性は、毎朝自宅前の小公園でゴルフのスウィングの練習をしている。小公園の木々はゴルフのグリーンのホールやフラッグの役割を果たす。友人が彼を訪ねてくる時は、彼の妻がこの小公園までお茶を出しにくる。彼らは小公園を予備の部屋のように使っている。

出典：**シリル・マルラン**, 1998〜1999年

33 それぞれの庭的行動においては、環境(内のモノ)の利用可能性が住民によって知覚され、日常空間を庭にするための言表行為による意味の変更が住民によって行われる。ある時は、サクソフォンを演奏する若者や自転車で通勤するサラリーマンのように、空間の意味の変更は適切なタイミングである場所に「身を置く」ことによって成立する。またある時は、それは特定の生物(空き地の老人たちの庭)や他の住民(花屋)に向けられたちょっとした善行をともなう。さらにまたある時は、植木鉢の老婦人とゼラニウムの老婦人の庭のように、空間内での単純な要素の配置や移動による暫定的変化によって成立する。空間を庭とする言表行為は、「庭をつくる者」の庭的行動を通じて現れる。

34 いずれの場合も、環境の状況的要素が行動の方向付けの決定的要素となる。サイクリストにとっては太陽、サクソフォニストにとっては夜と音の反射、花屋にとっては夜と植物、猫の老婦人にとっては太陽と猫、老夫婦にとっては雑草や日照りがそれに当たる。個人とこれら諸要素の間の相互作用が、ある場所を庭として指し示す指標化を誘発する。この相互作用を、「風土的相互作用 *interactions médiales*」と名付けたい。この風土的相互作用の概念を、環境現象、生物、生物学的現象などが特権的役割を演じる一時的な空間状況を介して、個人の固有空間の生成行為を誘発するこれらの行動形態を説明するために今後使用する。それは、この庭づくりの行為としての時間を開始させ組織する庭をつくる者による、この状況を構成するすべての要素の状況に応じた配置という形で表出する。

35 これらの風土的相互作用が日常空間の意味を変則的なやり方で庭へと転向させる際に、新たな社会的相互作用が可能になるという仮説を立てることができる。言い換えれば、空間を庭とするこの新たな言表行為は、社会的相互作用の射程を再構成する能力を潜在的に持つということである。日常空間の主観化の集合的プロセスは再び別のやり方で可能であり、そのプロセスから「風土的集団 *groupement médial*」と名付けることができるようなより広義の新たな社会集団の形態が生まれるかもしれない。

東京、谷中の庭

36 20年前に東京都の谷中地区で著者が観察した庭の例は、このような風土的集団の複雑な発展プロセスを説明するために役立つ。谷中地区は東京の「下町」と呼ばれる地域に属しており、第二次世界大戦の空襲による消失を逃れたため特に狭い路地から成る街並みがいまだ残っている。谷中の住民の多くは、自宅前のアスファルト舗装された路地の上に庭を拵えている。日本の都市部では、このような形式の庭が広く普及している。主に鉢植えで構成されるこれらの庭は、時に箱庭とも呼ばれる。『日本の生活空間』事典の中では、「江戸時代の園芸文化の飛躍的な発展がもたらした豊かな文化的背景に由来し、独特の都市的および建築的形態に組み入れられる園芸実践」(Brosseau, 2014 年)と定義されている。著者にとって、20年前の谷中地区の庭は大変面白い研究対象であった。そこでは住民による庭の活動が通常では考えられないほど重要で、住民の庭づくりの行為だけで地区

の整備が成り立っているような印象を受けるほどだった。しかし、観光地としてメディアで脚光を浴びたことで地域社会は変容してしまった。20年前に著者が観察した鉢植えの庭の意味は、今日ほとんど失われている。

図2.東京、谷中の小さな路地

谷中の住民たちが自宅前のアスファルト舗装の路地上に拵えた庭が、地区の全体的な雰囲気を醸成していた。

出典：シリル・マルラン, 1998〜1999年

37 2000年から2003年の3年間、著者はそれらの庭の詳細な観察を行った。小さな長屋の2階部分に住居を構えた著者は、谷中の住民に倣って自宅前の路地に自ら庭をつくった。著者がここで採用した方法論については、これら路地の庭は多くの科学的観察および解釈の対象となっているが、庭の経験の類型を把握するためには、庭をつくる住民を観察するだけでなく自分自身で庭をつくることが必然であるという仮説に基づいている。この方法論によって庭づくりの行為の観察対象をこれらの行為の経験そのものへとずらすことが可能になると考える。

38 日常空間を庭にする住民の生成行為の意味を考えるには2つの道が可能である。1つは、社会的相互作用に基づく解釈システムに入り込むことである。その場合、例えばこれらの庭は路地と家の間の境界面/閾にある自己のプレゼンテーションの空間となるだろう。また、住民間の交換システムに相応しい空間にもなる。さらにそれらを家の前の私的な庭空間であった庭先(にわさき)の段階的な消滅の歴史的過程から生じた産物とすることで路地空間の再私有化の現象を部分的に説明できるかもしれない。このようにこの道がこれらの庭の理解に必要な要素を与えてくれることは間違いない。しかし、庭を介して個人間の関係を強調する一見「社会的」な解釈の背後には、庭を、なるほど囲われてはいないが家と隣接する空間という所有物の延長、一種の「占有」状態の言表へと引き戻してしまう個人/社会のカップリングが暗に存在する。庭づくりの行為をこのように捨象的に還元するこ

とは、この場合庭づくり行為の実際の意味、さらに広義には庭づくりの個人的行為と住民たちによる地区の空間の集団的生成行為との相関関係を理解することを妨げてしまう。もう一つの解釈の道は、風土的相互作用のより複雑な位相にこれらの「庭的行動」を位置付けることである。この道は、庭の「占有」モードの言表を前提とせずに現実を庭とする言表行為を規定することを重視する。言い換えれば、次の問いに答える幸運を自らに与える。路地の一部を庭として指し示す行為は、どのような風土の変容プロセスを展開させるか？どのような環境の集団的生成技術が実際に用いられているか？図3に示された庭の例がこれらの問いを理解する手掛かりを示してくれる。

図3．東京、谷中で観察された庭の例

東京都台東区谷中3-11-4
祭日の庭
祝祭日や地区内での祭事があるごとに、耳の遠い老人は、祭事にちなんだ造花で飾られた枝の束を家の前にある灌木に掛ける。花の色は祭事に応じて変化する。造花は2日を超えて飾られることはない。2日後、老人は造花の枝をビニール袋の中に入れて片付ける。
東京都台東区谷中3-9-19
階段の庭

ある女学生が、住んでいるアパートの階段にオブジェや植物を並べている。これらのオブジェは場所を変えるか消えて、その後また新しいオブジェが一定期間並べられる。オブジェは、小さな花瓶に活けた切り花だったり、小さな鉢に飾られた麦藁でできたクマだったり、2本の灯された蝋燭だったりする。この学生はアパートの階段を自分の庭のように使っている。庭はこの学生の日常生活の中で得られた私的なオブジェの一部を展示する一種の展示場になっている。ある日、学生は引っ越して階段のオブジェは消えてしまった。
東京都台東区谷中3-11-1
ゴミ捨て場の庭
住民の共同ゴミ捨て場の掃除をする老婦人がいる。老婦人の手で、ゴミ捨て場は「フランス風の」可動性の庭になっている。彼女はまた、ゴミ捨て場の壁沿いに10個ほどの鉢植えを等間隔に置いていた。2本の小木を鉢植えの連なりの両端に配置したその庭はシンメトリーな外観を呈する。ゴミ収集車が通る前の日には、路地の住民がゴミ袋をゴミ捨て場に置けるよう鉢植えは移動させられる。隅の2本の小木は、ゴミを置いてもよい場所の境界を示すために置かれたままだ。ゴミ収集の日には、小木に茂った葉や時期によっては花がゴミ袋の山から姿を見せている。午前8時15分にゴミ袋が回収されると鉢植えは再び壁沿いに並べられる。3か月間、イギリス式庭園と城の画像がちょうどゴミや植物がある場所の上にあるゴミ捨て場に面した家の窓に貼られていた。
東京都台東区谷中3-11-1
移動するキリンの庭
(路地にあるエアコンの室外機周辺の小さな庭) ある老婦人は、路地のアスファルト舗装の上にキリンの形をした鉢植えを置いている。キリンの胴の部分に小木が植えられている。ミニチュアの森のような植物の鉢植えの中で、キリンの鉢植えの場所は頻繁に変えられる。 老婦人は、キリンの鉢植えから1,70mほど上の家の外壁沿いに海に沈む夕日の額入りの絵を掛けており、庭の鉢植えの背後に水平線に沈む太陽を見ることができる。
東京都台東区谷中3-11-18
金魚の墓
ある老夫婦は、チューブの中に葬られ、防腐剤で固められた2匹の金魚を、自宅前に拵えた庭の苔と羊歯の鉢植えの中に置いている。この老夫婦は、庭を金魚を悼むための墓地として使っている。金魚の墓の存在は滅多に気付かれることはない。ある日金魚のチューブは消えてしまい、庭は再び庭に戻った。

Les paramètres nécessaires sont manquants ou erronés.

東京都台東区谷中3-11

ポインセチアとシクラメンの共同庭園

谷中地区の商店の経営者が話し合い、商店街全体で販促活動をすることが決まった。それを谷中の住民に知らせるために彼らは特殊な庭をつくった。花屋によってポインセチアとシクラメンの200個の鉢植えが納入され、すべての商店が店先の路上にその鉢植えを置いた。谷中の住民は、こうして路上1kmにわたってランダムな間隔ではあるがそれなりに綺麗に並べられた花の鉢植えに遭遇した。ほとんどの鉢植えが、路上の車道と歩道を分ける2本の白線上、もしくは白線の内側か外側に配置されていた。いくつかの鉢植えは、路上に設置されたテーブル、ベンチ、椅子、板、石、たらいなど、つまりこの販促活動のために1日だけ飾られる花の鉢植えを支える台座となり得るものすべての上に置かれていた。次の日、全長1kmに及ぶ庭は消えてしまった。いくつかの鉢植えがしまい忘れたままになっていた。

東京都台東区谷中3-18

自転車の庭

ある老人は、毎日自転車で買い物に出かける。買い物から帰ると、サドルを外して代わりに板を置き、その上に鉢植えの植物を置いている。自転車の前カゴにも鉢植えを一つ入れている。次の日買い物のために自転車に乗る際は鉢植えを降ろしてサドルを再び取り付け、自転車のあった場所に鉢植えを置いて出かける。

東京都台東区谷中3-12

階段の庭

ある男性は、高さ2m、長さ30mの壁を覆い隠す大きな木製の鉢植え棚を製作し様々な大きさの盆栽で埋め尽くしている。この男性は彼が出会った谷中の住民に定期的に盆栽をプレゼントしていた。そのため棚の鉢植えの数は減ったり増えたりしていた。

出典：**シリル・マルラン**, 1998〜1999年

39 これらの庭の地理学的および風景的意味の脇を素通りしないためには、それぞれの住民が庭をつくる時にする行為の特異性そのものから出発する必要がある。行動と意思決定の原初的な自律性の状況のうちに各々の住民を再び位置付けなければならない。住民たちが共通の規則と社会的相互作用の駆け引きのシステム(自身の表象、交換、共同空間の占用規則、公共空間でできる事とできない事に対する住民の規定制度など)に組み込まれていることが自明だとしても、社会的相互依存のグリッドを用いた庭づくりの行為の解釈が、路地の一部を庭とする住民の生成行為における個人的なものを理解するための障害であってはならない。すべての庭は、人間間の相互作用の場である前に一つの世界の表現である。したがって、それは社会的相互作用の単なる産物としてよりも、風土的相互作用の個別的結果として見なされるべきである。風土のミクロ的な条件と可能性に欲望を適応させる策略がそこには見て取れる。谷中地区のような合議のないまま行われる路地空間の生成プロセスにおける集団的なものはいずれにせよコモンズの共有という幻想、集団構築の幻想に属するものではなく、住民造園家の世界が複雑に絡み合った混沌とした形態の一つの可能性なのだ。それはまた画一的な行動方針ではなく混成的な行動方針にしたがい、共同プロジェクトにともなう行動の規範化の制約にしたがうこともない。

谷中地区の庭的行動における個人/社会のカップリングのダイナミクス ：イディオリトミー *idiorythmie*と「場」

40 谷中の住民たちがつくっていた庭の特異性は、庭で何をするかということよりもどのように庭をつくっているかということに依拠する。つまり、それらの空間の生成行為と時間との関係に依拠する。これらの庭はすべて、住民自身の意志のみを参照する一種の個人のミクロな時間性を示している。時間は、ここでは庭づくりの個人行動の基本的な構成要素とされる。それぞれの庭は、固有の時間性と、欲望と　風土的相互作用に応じて異常な速度で外観を変容させる能力によって基礎付けられる。ある庭は、庭をつくる者がその日に得たものに応じて変化する。またある庭は、地区で毎年開催される祝祭のサイクルに応じて変化する。別のある庭は、ゴミ収集車が通るサイクルに応じて変化する。さらに別のある庭は、その極小空間内でのキリンの鉢植えのランダムな移動のサイクルに応じて変化する。またさらに別のある庭は、死んだ金魚の慰霊のために数ヶ月変化のないままでい

る…。これらの庭の外観と性質そのものにおいて時間の果たす役割はこれほどまでに重要であるがゆえに、著者は、谷中の住民たちが庭を通して整備するのは空間の構成以上のもの、つまり時間知覚の集団的様式であり、谷中地区の外観の集団的リズムであるという一つの観察結果を導いた。この風土の本質的構成要素としての時間の概念を通して個人/集団のカップリングがこの場合実現される。

41 ここからは「共生」についてのロラン・バルトの思想に立ち戻る必要がある(Barthes, 2003)。今日広く流布している、「共有する」こと、または社会規則あるいは法律により支配される「共有」プロセスの暗黙のアプリオリに基づく社会的なものの解釈に逆らって、バルトは、共同幻想と彼が形容したものに代わって、行動の単一性・特異性を排除しない共生のアプローチという新たな道筋を示した。この時バルトは、時間のパースペクティブを拠り所にした。バルトにとって共に生きることは、「イディオリトミー*idiorythmie*」の可能性を生み出す条件を提示することを意味した。語源的に、イディオリトミーは個人または存在の「独自のリズム」を指す。この語は宗教的な文脈において使われていた語で、一部の正教派修道院の修道士達が、一定の規則を介して独自のリズムで共同生活を組織していくための日常の組織体制を指していた。谷中の庭が何かの表現であるとすれば、よってそれは路地での庭づくりの行為を通して一種のイディオリトミーを生み出す住民自身の能力の表出ではないだろうか。

42 まさにここで「私的な」庭づくり行為の考察を風景の考察へとずらすことができる。イディオリトミーの概念は、状況に応じた人間同士の繋がりの様々な形態の理解を可能にする日本語の「場」という語の意味の使用域からそんなにかけ離れたものではない。「場」の複合的な意味については、『日本の生活空間』事典の中でベルクによって要約されている。

> 「「場」は、主に3つの意味を持ち得る。1. 場所。2. あることが行われる場所。3. あることが行われるあり様・状況。文脈によって使用される意味は変わるが、その場合他の2つの意味も言外に示される。つまり、「場」は実際的なのである。「場」では、場所、人々、モノ、事象が「共に成長 croître-ensemble (*cum crescere* > *concretus*) 」する」(Berque 2014)。

43 「場」の概念の実際的な性質は、「近代的な西欧のパラダイム、とりわけ「普遍的空間」の概念とその完全な中立性に異議を申し立てる。反対に、「場」は特異性そのものであり、決して中立ではない。すべてが場に依存する」(*ibid.*)。場の概念は近代的な西欧個人主義とは異なる個人への地理学的アプローチを可能にし、「個人主体は、状況の展開の中で消え去り、コンジョンクチュール conjoncture(様々な状況の結び付き)になる」(*ibid.*)。ベルクが引用した中根千枝によれば、「個人は、集合的な「場」への帰属と同一化なしには生まれえない」(2014)。著者が住民の庭的行動を通して観察した谷中地区の空間生成のプロセスは、集合的な「場」を理解するための重要な鍵であり、住民の庭づくりの行為が場の構造に組み込まれていることを示す一例である。

44 ベルクはさらに「「場」の経験をすることは、人の「間」(人と他者との間)で構成された「人間(個人)」との交わり(出会い)を経験することである」と述べている。言い換えれば、「場」の経験は、この出会いの周辺事情によって身体的に、今この瞬間にどこかで、複数の個人の間にどのように社会が「流れるpasser」かを知ることである。それはいわば、個人の経験が社会として構成される原初の瞬間の経験をすることである。ここに風景の概念に「特別なトーン」を帯びさせるための手掛かりがある。つまり風景はこの社会の流れ、この出会いの一つの様態であると考えられる。

結論

45 「私的な」庭についての一般的な概念を修正する必要がある。フランスの地理学者が庭に関心を示す場合、常に/すでに社会的な庭の見方を誘発する個人/社会のカップリングを前提とする傾向がある。彼らは、庭を庭であらしめる行為の本質を見ないで、直ちに庭を社会的なものの指標装置にしてしまう。暗黙のうちに、そして常に、庭をつくる者と庭をつくる際に彼が行う行為の存在を消去してしまう。実際この傾向は、地域の様々な社会的役割(当事者、傍観者、訪問者など)を優先させた結果、住民を消去してしまう風景の概念のアプローチにおいて同様に見られる地理学的思考の癖である。

46 私的な庭を暗に従属する概念装置から脱却させるためには、以下の3点の修正が必要である。

1. 「庭づくり行為の原初的な意味*sens primordial de l'acte de faire un jardin*」に立ち返る必要がある。家屋に隣接した囲われた庭の形態は、庭の形態の多くの可能性の一つでしかなく、庭づくりという行為の歴史的な制度化のプロセスの結果にすぎない。囲われた空間という慣例的な形態を取る前に、庭づくりの行為は、現実の断片を状況に応じて庭として指差す指標化のプロセスに属している。言い換えれば、庭づくりの行為は、常に現実の一部を庭とみなす言表行為のプロセスから始まる。日本の「見立て」(のようにみなす)の概念と庭の古代の意味は、このような庭づくりの行為の原初的な意義の理解を助けてくれた。
2. 私的な庭を、一つの空間形態とする前にまず経験として見なさなければならない。この経験は、庭的行動と名付けることができる庭づくりの行動のうちに翻訳される。私的な庭とは、象徴的で特殊な物質的空間である前に、個人とその環境との相互作用の特定の様態が空間の中で具象化された多かれ少なかれ明示的で設えられた形態である。個人とその環境との相互作用を、著者は風土的相互作用(*interactions médiales*)と呼ぶ。それらは庭的行動（*comportement-jardin*）を通して観察することができる。東京の池袋と谷中の特異な庭の詳細な観察により、住民の庭的行動を理解することができた。
3. 私的な庭の社会的次元は、社会的相互作用だけでなくより広義の風土的相互作用に依存する。認識論的観点に立つゴフマン(1983)が重視した個人/社会のカップリングは、この場合個人の生活経験の固有の状況、固有の欲望、環境に自ら働きかけていくことで風土の発展に寄与する個人の能力を消去してしまう暗黙の傾向に基づくものであってはならない。社会生活と風土の様々な変容のプロセスを理解するために決定的な役割を果たすこのカップリングの概念操作は、それとは反対に風土の諸状況における個人的な経験のすべての構成要素に基づくべきである。このようなカップリング方法を用いることで、どのように個人と環境の相互作用に基づいた共同空間または「場」が形成されるのかを複合的に理解することができる。20年前、谷中地区の路地で住民がつくっていた庭の観察は、風土的相互作用のアプローチが個人の庭づくりめいた微妙な行為を介した共同空間のほとんど知覚不可能なアジャンスマン(複合)の様態を検出するためにどれほど役立つかということを我々に示してくれた。

47 個人の庭的行動と共同空間を重ね合わせるこの方法は、私的な庭の問題を風景の問題に結び付ける。この方法によって「私的」な庭は社会生活の地理学的理解のためのツールとなり、風景を通して社会を理解する手段となり得るのだ。

お忙しい中、本稿の翻訳のレビューを快くお引き受け頂き、貴重なご助言を賜りました東京工業大学名誉教授・中村良夫先生に心より感謝申し上げます。

BIBLIOGRAPHIE

Barthes, R., Cours au Collège de France, 1976-1977.Comment vivre ensemble (CD Audio), Paris, Seuil, 2003.

Baud, P., Bourgeat, S., Bras, C., *Dictionnaire de la géographie*, Paris, Hatier, 2013, 607 p.

Berque, A., « Voir comme : de paysage en mésologie », in Marlin C. (dir.), *Autour de Nakamura Yoshio, une pensée du paysage entre France et Japon*, Presses Universitaires de Bordeaux, 2021 (à paraître).

Berque, A., « *ba*, le lieu », in Bonnin, P., Nishida, M., Inaga, S. (dir.), *Vocabulaire de la spatialité japonaise*, Paris, CNRS éditions, 2014, p. 40-42.

Berque, A., *Écoumène.Introduction à l'étude des milieux humains*, Paris, Belin, 2000, 271 p.

Bonnin, P., Pezeu-Massabuau, J., *Façons d'habiter au Japon.Maisons, villes et seuils*, Paris, CNRS Éditions, 2017, 494 p.

Bonnin, P., Nishida, M., Inaga, S. (dir.), *Vocabulaire de la spatialité japonaise*, Paris, CNRS Éditions, 2014, 605 p.

Brosseau, S., « *Hachiue*, les plantes en pot », dans Bonnin, P., Nishida, M., Inaga, S. (dir.), *Vocabulaire de la spatialité japonaise*, Paris, CNRS Éditions, 2014, p. 154-157.

Brunet, R., Ferras, R., Théry, H., *Les Mots de la géographie, dictionnaire critique* (1992), Montpellier, Reclus, 2005, 518 p.

Certeau, M. de, *L'invention du quotidien*, t. 1, *Arts de faire*, Paris, 10/18, 1980.

Claval, P., « L'étude géographique des parcs et des jardins », *Bulletin de l'Association de géographes français*, 66-3, 1989, p. 167-175.

Deleuze, G., Guattari, F., *L'Anti-Œdipe.Capitalisme et schizophrénie*, Paris, Les Éditions de Minuit, 1972.

Bernard, F., *Démons et jardins.Aspects de la civilisation du Japon ancien, Paris*, Collège de France, Institut des Hautes Études Japonaises, 2011

Fiévé, N. « niwa, le jardin, dans Bonnin, P., Nishida, M., Inaga, S. (dir.), *Vocabulaire de la spatialité japonaise*, Paris, CNRS éditions, 2014, p. 364-367.

George, P., Verger, F. (dir.), *Dictionnaire de la géographie* (1970), Paris, Quadrige, PUF, 2013, 478 p.

Goffman, E., « The interaction order », in *American Sociological Review,* vol.48, n°1, février 1983, p. 1-17.

Hocquard E., *Ma haie*, Paris, P.O.L., 2001, 605 p.

Guattari, F., *Qu'est-ce que l'écosophie ?*, recueil de textes présentés par Stéphane Nadaud, Fécamp, Éditions Lignes, 2013, 586 p.

フェリックス・ガタリ, エコゾフィーとは何か　ガタリが遺したもの, 杉村昌昭訳, 東京, 青土社, 2015.

北村眞一, 中村良夫, 岡田一天, 田中尚人, 都市を編集する川-広島.太田川のまちづく,広島、渓水社, 2019年, 178.

Hoyaux, A.-F., « Pour une approche constitutiviste de l'habitant en géographie culturelle », *Géographie et Cultures*, 93-94, 2015, p. 113-134, mis en ligne en septembre 2016, URL : http://journals.openedition.org/gc/3920 ; DOI : https://doi.org/10.4000/gc.3920.

Lacoste, Y., De la géopolitique aux paysages, dictionnaire de la géographie (2003), Paris, Armand Colin, 2009, 413 p.

Lassus, B., *Jardins imaginaires*, Paris, Presses de la Connaissance, coll.« Les habitants paysagistes », 1977, 191 p.

Lazzaroti, O., *Habiter.La condition géographique*, Paris, Belin, 2006, 288 p.

Leroi-Gourhan, A., *Le geste et la parole, T.2 La mémoire et les rythmes*, Paris, Albin Michel, 1965, 285 p.

Leroi-Gourhan, A., *Milieu et Techniques*, Paris, Albin Michel, 1945.

アンドレ・ルロア＝グーラン, 身ぶりと言葉, 荒木亨訳, 東京, 筑摩書房, 2012.

Lévy, J., Lussault, M. (dir.), *Dictionnaire de la géographie et de l'espace des sociétés* (2013), Paris, Belin, 2019 1127 p.

Merleau-Ponty, M., *La Structure du comportement* (1942), Paris, PUF, 1972.

Merlin, P., Choay, F. (dir.), *Dictionnaire de l'urbanisme et de l'aménagement* (1988), Paris, Quadrige, PUF, 2015, 880 p.

Moles, A. et Rohmer, E., *Psychologie de l'espace*, Paris, Casterman, 1972.

中村良夫, 風景学入門, 東京, 中央公論社, 1982年, 244 p.

Oury, J., Guattari, F., Tosquelles, F., *Pratique de l'institutionnel et politique*, Vigneux, éditions Matrice, coll.« Pi », 1985, 141 p.

Pezeu-Massabuau, J., « Problèmes géographiques de la maison japonaise », *Annales de géographie*, t. 75, nº 409, 1966, p. 286-299.

Pumain, D., Paquot, T., Kleinschmager, R. (dir.), *Dictionnaire.La ville et l'urbain*, Paris, Economica Anthropos, 2006, 320 p.

Reclus, É., *Nouvelle Géographie universelle.La Terre et les Hommes*, vol. 1, Paris, Librairie Hachette et Cie, 1876, 1007 p.

Staszak, J.-F., « L'espace domestique : pour une géographie de l'intérieur », *Annales de Géographie*, t. 110, nº 620, 2001, p. 339-363.

Varela, F. G., Maturana, H., Uribe, R. B., « Autopoesis:The Organization of Living Systems, Its characterization and a Model » (1974), *Biosystems*, 5(4), p. 187-196.

和辻哲郎、風土 人間学的考察, 東京, 岩波文庫 (1935年), 2010年. *Fūdo.Le milieu humain*, traduit par Berque, A., Paris, CNRS, 2011.

Wiener Benedetti, U., « Himorogi, l'enclos sacré », dans Bonnin, P., Nishida, M., Inaga, S. (dir.), *Vocabulaire de la spatialité japonaise*, Paris, CNRS éditions, 2014, p. 172-174.

NOTES

1. 「オートポイエーシス」はフランシスコ・ヴァレラとウンベルト・マトゥラーナ (1974)が生物を定義するために提唱したコンセプトで、後に様々な学問領域、特に社会学に応用された。オートポイエーシス理論の特徴は、システムまたは生物が持つ環境との相互作用に

よって絶えず自分自身を生産していく「創造poïesis」の特性への言及である。生物をつくるのは他の何物でもなく生物自身なのである。
2. 河原院についてはベルナール・フランクの著作(2011)を参照
3. 囲われた場所は庭を特別な空間にする境界画定の行為に付与される形態の一つでしかないが、最終的に庭をアプリオリに空間的に定義するやり方を助長させる。

RÉSUMÉS

「私的」な庭は、風土 *milieu humain*を理解するための地理学者の研究対象およびツールとなり得るだろうか？この問いは、地理学で用いられる風景*paysage*の概念といかに関係するのか？本稿では、日本文明の特色を秘めた庭の体験から、「私的」な庭の概念を再考してみた。特に、近代にその学問領域が構築された歴史的概念である「風景」とは逆に、地理学の言説における「私的」な庭の概念の相対的不在について検討したい。地理学における庭の概念装置を解体し再構築するために不可欠な鍵として、本稿では「風土的相互作用 *interaction médiale*」の概念を導入した。庭についての特定の概念と個人の空間生成行動の自律性の問題を絡み合わせることで、社会の空間的次元という地理学的観点における庭と風景の概念の関係を明確に復元することが可能になると考える。

How can the "individual" garden become a part of the objects and tools used by the geographer to apprehend the human environment?How does this question relate to the seemingly wider question of the ways in which the notion of the landscape is used in geography?Singular experiences of gardens observed in Japan, combined with features of Japanese civilisation, are used here to consider the idea of the "individual" garden from a different perspective.More specifically, in reference to its relative absence in the language of geography as opposed to that of the landscape, a historical notion which has accompanied the modern construction of the discipline.The notion of *medial interaction* is put forward as an essential key to the garden's conceptual deconstruction and reconstruction in geographical terms.It is the overlapping of the question of the autonomy of individual behaviour in the installation of gardens according to a specific idea of the garden that makes it possible to re-establish a link between the notions of garden and landscape from the geographical perspective of the spatial dimension of the social environment.

INDEX

Keywords : garden, geography, Japan, landscape, inhabitant
キーワード : 庭、地理学、日本、風景、住民

AUTEURS

CYRILLE MARLIN シリル・マルラン

ランドスケープ・アーキテクト、地理学者、ボルドー国立高等建築景観学校(ENSAP)准教授、Passages-UMR5319CNRS研究員
cyrille.marlin[at]bordeaux.archi[dot]fr